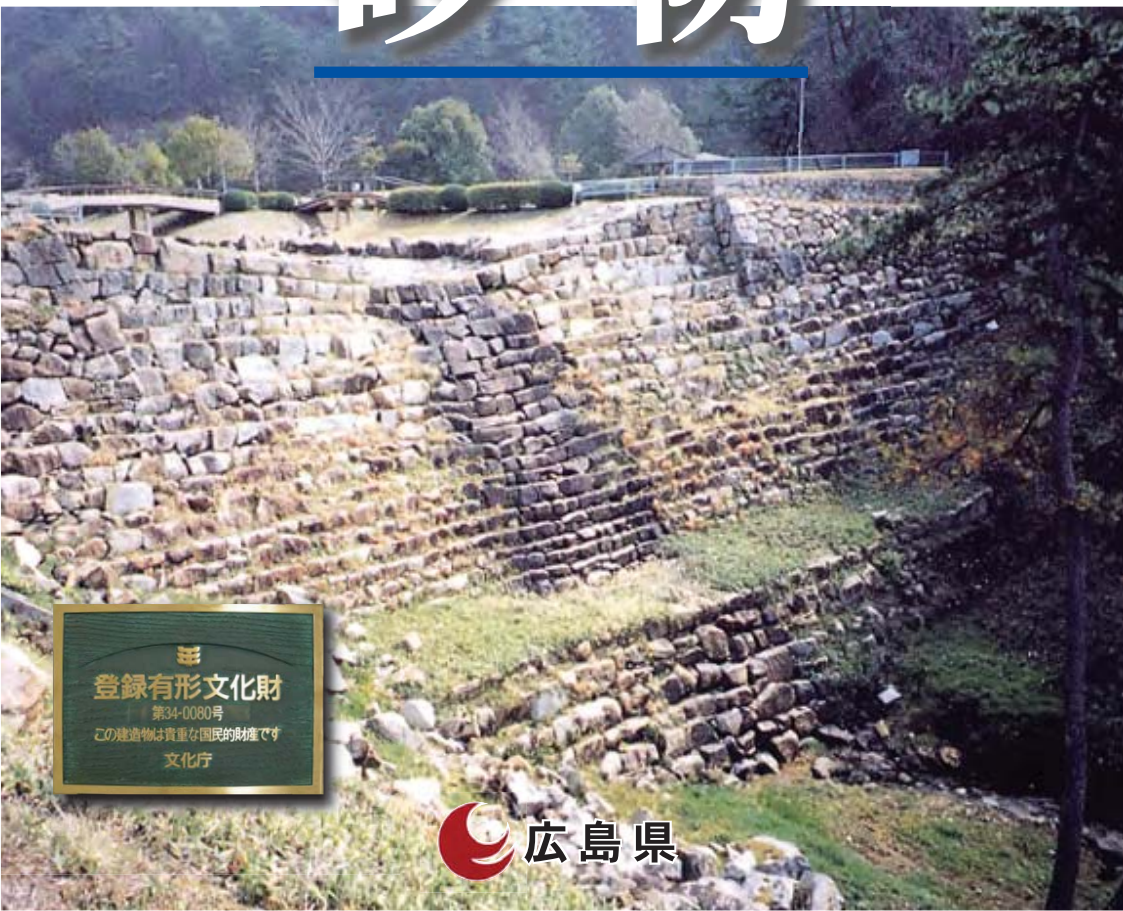


いにしえびと

古人によって、  
積み重ね続けた石が語る物語。――

どう どう がわ

# 堂々川の砂防

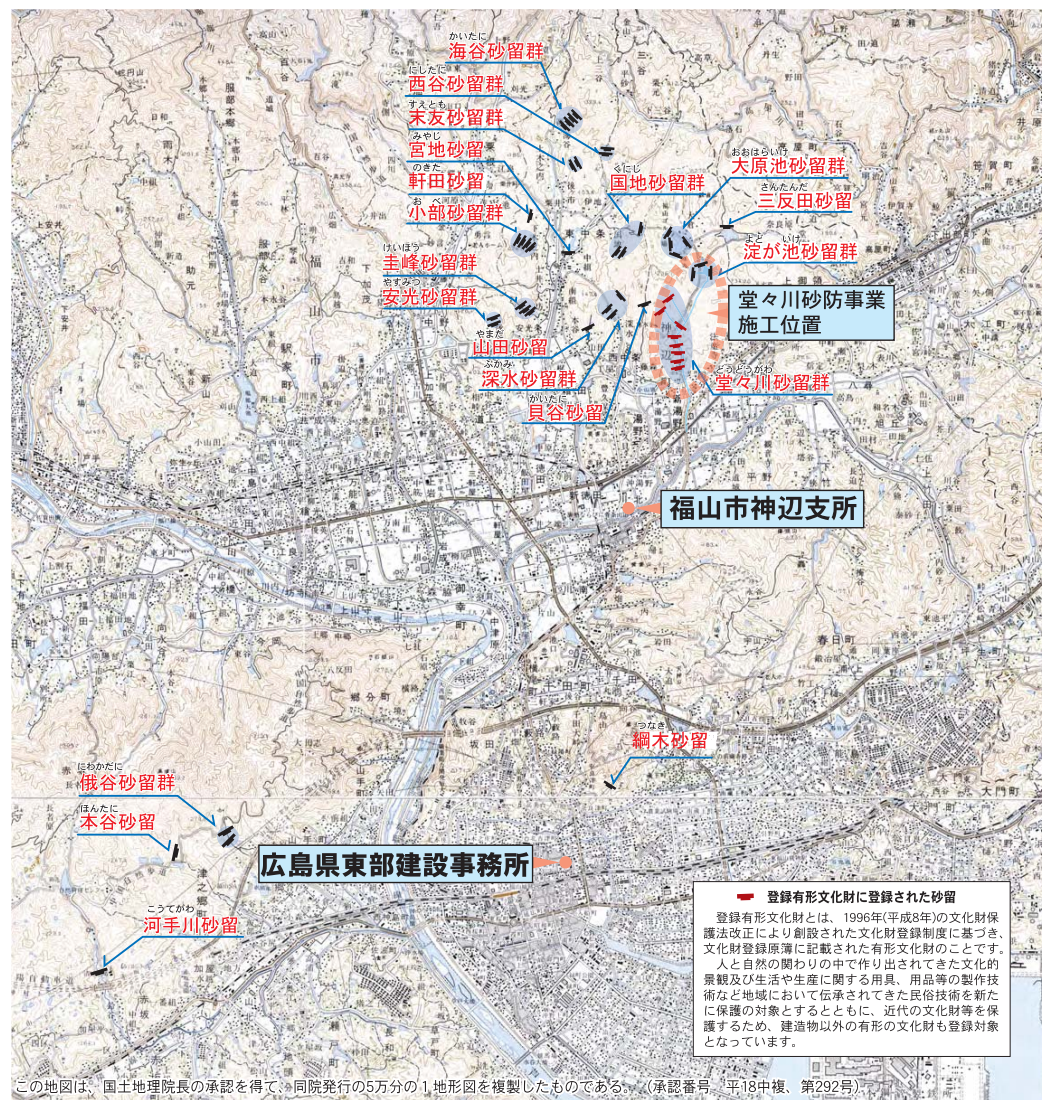


登録有形文化財  
第34-0080号  
この建造物は貴重な国民的財産です  
文化庁



## 福山藩砂留位置図

福山藩が築造した砂留は、福山市の広い範囲に残され、嵩上げ、増築を重ねて、現在も機能しているものが多いです。このうち、堂々川砂留群は、登録有形文化財に、登録されました。



平成28年6月豪雨 堂々川6番砂留



堂々川6番砂留と彼岸花



# ひらかれる砂防～ 砂留の歴史を未来へ

堂々川では、土木遺構であり文化財としての価値を持ちながら、現在でも砂防堰堤として機能し続けている砂留群があり、これらの砂留群を活かしながら、周辺の環境との調和を図った砂防事業を行っています。

## 砂防事業



堂々川6番砂留と堂々公園

堂々川の支川にあるとびがきこ鷹ヶ迫砂留、うちひろ内廣砂留は、一部崩れていましたが、残っている石積にあわせて修復し、新しく造られた砂防堰堤や床固工も、石積をイメージした整備を行いました。

このように、堂々川流域では、砂留が造られ続けた歴史をふまえながら、砂留やその周辺の環境を活かした整備が行われています。

6番砂留上流部の堆砂敷を利用して造られた堂々公園は、日本庭園風に整備され、桜、藤など季節を彩る木々、野面石の石組み水路などで整備され、流れ来る砂とのひるみない闘いの中で構築された古人の業績を偲ばせるとともに、春は花見、夏は水遊び、秋には紅葉狩りなど、四季を通してにぎわう、人々の憩いの場になっています。



石張りの床固工

## 文化財登録

平成18年、堂々川6番砂留をはじめとする堂々川流域の8つの砂留は、地域的にも、技術的にも貴重なものとして、登録有形文化財に登録されました。



堂々川5番砂留と登録有形文化財銘板



堂々川4番砂留と登録有形文化財銘板

## 地域利用



カワニナの放流

ゲンジボタル

堂々公園では、毎年秋に「かなべウッドフェスティバル」などのイベントが開催されています。

また、地元グループなどが、河川清掃など、周辺森林や川の保全活動、カワニナの放流などホタルの育成活動を行っており、地域に根付いた利用が行われています。



堂々川砂防堰堤



修復された鷹ヶ迫砂留



# 現代に生き続ける古の土木遺構

## 堂々川の砂防史

堂々川は、福山市神辺町大字東中条東山に源を発し、一級河川芦田川の支川高屋川に合流する延長4kmの溪流です。

流域の地質のほとんどは白亜紀の黒雲母花崗岩と流紋岩ですが、特に、花崗岩は深層まで風化し、表土が流出しやすい状況にありました。山地は天然更新が進行しにくく、植林も行われなかったため、荒廃していくばかりで、度々災害に見舞われています。

江戸時代の記録に、寛永18年(1641)の台風被害を憂え、藩主から家老に宛てた文書が伝えられていますが、この頃から土砂災害が顕著に現れはじめています。

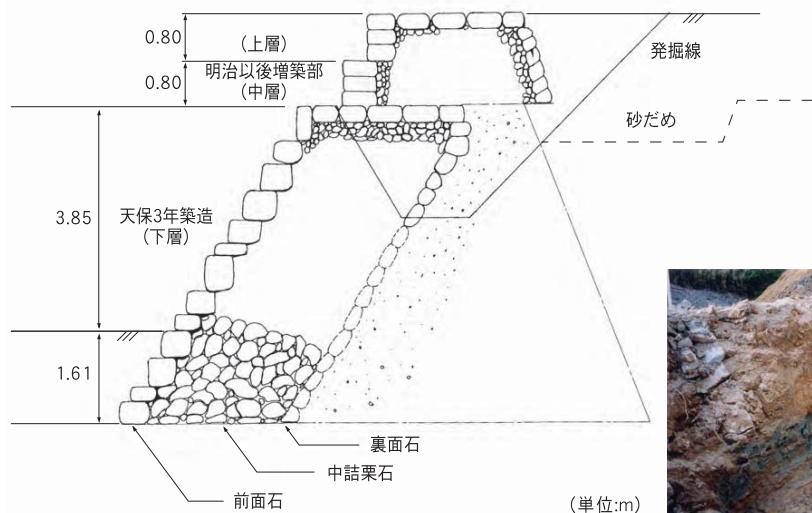
福山藩では藩の重要な施策として、広域に渡って砂防工事を実施しており、堂々川を含めて“砂留”と呼ばれる砂防堰堤を数多く築造しています。

江戸時代の砂防工事については不明点も多いですが、福山城博物館所蔵の『三谷家文書』から天保年間の砂留普請記録が見つかり、江戸時代の砂防工事の一端を知る貴重な資料になっています。

現在、堂々川流域には11基の砂留がありますが、堂々川6番砂留は、天保6年(1835)施工の記録がある古い砂留で規模も大きいもので、城壁を思わせる石垣は今も健在で、往時の技術の確かさを示しています。

### 堂々川3番砂留の構造

平成8年、堂々川3番砂留の掘削調査が行われ、砂留の構造が明らかになりました。



いにしえ

## 堂々川1番砂留

登録番号 34-0075

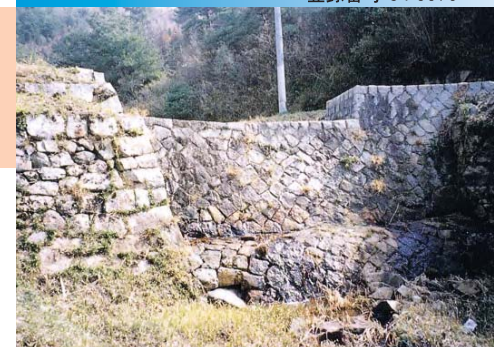


砂留の規模：堤高3.2m 堤長9.6m  
構造型式：石塊段積堰堤型式  
石積方法：成層布積  
築造年代：安永2年(1773年)より前(推定)

田畑や家屋の土砂災害を防ぐために、先ず造られたと考えられる砂留です。今見られるものは、嵩上げ増築を繰り返した砂留の一部で、下御領村の『場所箇所附帳』という古文書の記録によると、堤長10間7尺(約20m)の大型砂留だったとあります。

## 堂々川2番砂留

登録番号 34-0076



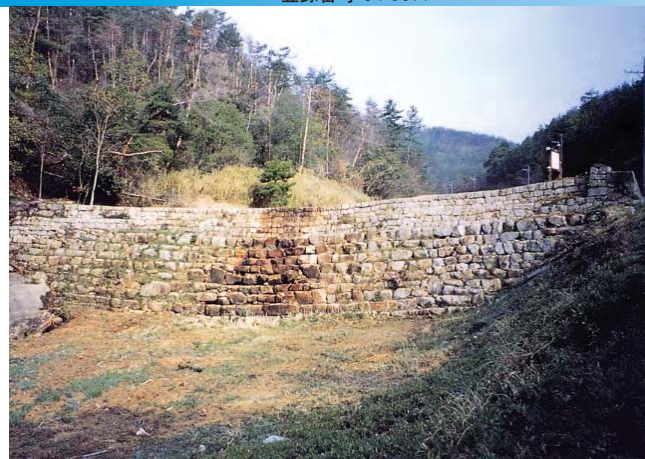
砂留の規模：堤高3.9m 堤長25.8m  
構造型式：石壁堰堤型式  
石積方法：右岸袖部/乱層乱重ね積  
水通し部・左岸袖部/谷積  
築造年代：江戸時代後期(推定)  
水通し部・左岸袖部は明治以降改築

江戸時代後期の築造と考えられていますが、水通し部の谷積は、大正元年～大正4年にわたって増改築されたものです。

中央の水通し部に接続して、谷積の水たたき部が設けられた形状が特徴になっています。

## 堂々川3番砂留

登録番号 34-0077



砂留の規模：堤高5.46m 堤長36.2m  
構造型式：もたれ式石殻よう壁体型式  
石積方法：成層布積  
築造年代：天保3年(1832年)着工  
上層部は明治以降嵩上げ増築

上層と下層の二段からなるこの砂留の下層の部分は、『潼々谷餘滴』(明治26年 訴訟記録)に「とうとう砂留御普請人足着帖、辰三月十三日、下御領村、三月十四日人足六人とうとう3番砂留へ遣す」という記録があり、天保3年(1832年)から築造したことがわかっています。



# 堂々川の砂留

## 堂々川4番砂留

登録番号 34-0078



砂留の規模：堤高3.3m 堤長31.5m  
構造形式：石壁堰堤型式  
石積方法：右岸袖部/成層布積  
水通し部・左岸袖部/谷積  
築造年代：江戸時代後期（推定）明治以降改築

江戸時代後期の築造と考えられていますが、記録は残っていません。  
2番砂留と同様、中央水通し部に接続して、谷積の水たたき部が設けられた形状が特徴になっています。

## 堂々川5番砂留

登録番号 34-0079



砂留の規模：堤高8.8m 堤長31.4m  
構造形式：石塊段積堰堤型式またはもたれ式石殻よう壁体型式  
石積方法：準成層布積  
築造年代：天保3年（1832年）～天保6年（1835年）[推定]  
最上部は昭和になって嵩上げ増築

築造年代の記録はありませんが、石積方式、形状から、3番砂留に次いで築造されたものだと考えられ、構造型式も3番砂留と同様である可能性が高いと思われます。

元は、西の山際まで延びていましたが、道路工事によって一部が取り壊され、現在の形になっています。

## 堂々川6番砂留

登録番号 34-0080

砂留の規模：堤高13.3m 堤長55.8m  
構造形式：石塊段積堰堤型式またはもたれ式石殻よう壁体型式  
石積方法：成層布積  
築造年代：天保6年（1835年）[推定]  
上層部は明治5年嵩上げ増築 最上層部は昭和に増築



全体の石組みは、基層、下層、中層、上層の4層から構成されています。『潼々谷餘滴』に「天保六年七月とうとう筋大砂留め御普請人足着帳、下御領村」という記録があり、この年に築造を始めたと考えられています。

また、『御樋方・御郡方・村方普請場所附帳、安那郡下御領村』に「とうとう奥砂留三ヶ所」に記録されている一つが6番砂留と言われており、基層部分がこれにあたるのではないかと考えられます。



堂々公園の『潼々谷余滴』と題された石碑には、

安那の海は彌砂の海となりけり  
川とは見えす埋もる砂留

年々にかく埋れ来て行末は  
いかにやならんせくすべもなみ  
と詠まれた二つの歌が刻まれており、この地域の人々と砂との長い闘いの歴史を偲ばせています。

平成6年10月撮影

## 堂々川筋その他の砂留

とびがきこ 鷹ヶ迫砂留 登録番号 34-0081



うちひろ 内廣砂留 登録番号 34-0082



よどが いけひがし 淀ガ池東砂留



よどが いけし わたりした 淀ガ池へへり峠下砂留



よどが いけし し わたりした 淀ガ池獅子渡下砂留

